

団子塚古墳群
H-1号墳発掘調査報告書
遺構編

2017

静岡県袋井市教育委員会



团子塚古墳群H-1号墳 遠景（東より）

例 言

1. 本書は、静岡県袋井市諸井に所在する団子塚群H地点1号墳（H-1号墳）の発掘調査報告書遺構編である。
2. 調査は、施設拡充事業に先だって和光商事株式会社（代表取締役 芝田俊行）より委託を受け、袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は袋井市諸井字北山2048番4外1筆を対象として実施し、その面積は391㎡である。
4. 発掘調査は袋井市教育委員会生涯学習課の水野雅彦を調査担当者とし、静岡県教育委員会文化財保護課の指導を得て実施した。報告書発行に係る資料整理は水野と北嶋未貴が担当した。
5. 発掘調査期間及び資料整理期間は下記のとおりである。

発掘調査	平成24年11月13日 ～ 平成25年3月13日
資料整理	平成25年2月28日 ～ 平成25年3月31日
	平成29年5月1日 ～ 平成29年12月25日
6. 発掘調査および本書の発刊に係わる事務は袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が担当した。
7. 本書の編集及び執筆は水野が行った。
8. 本書で用いた調査区全景写真は株式会社フジヤマにより撮影されたもので、遺構は水野が撮影したものである。
9. 本書に使用した遺構の実測図は、株式会社フジヤマが行った写測図を使用したものである。また、土層断面図や遺物出土詳細図等については水野が作成した。
10. 発掘調査によって出土した遺物や関係資料・記録はすべて袋井市教育委員会が保管している。
11. 発掘調査・資料整理従事者
田中利志江、富樫孝松、萩田権治、前嶋さとし、雪島和夫、松永門絵（順不同・敬称略）
12. 発掘調査にあたっては下記の方々にご教示、資料提供を賜った。（敬称略）
芝田政行、平出至、永田洋康、石山知良、前田匡秀、時田直宏、川江秀孝、柴田稔、鈴木一有、原利秋

凡 例

1. 挿図中のレベルは海拔、方位・測量図については国土座標真北（世界測地系）を使用している。
2. 本書で用いた色彩に関する用語、記号は新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）をもとに標記した。
3. 遺構平面図・断面図の縮尺は、図中にスケール等で示した。
4. 挿図中で「S」は礫、「C」は炭化物を示す。

目 次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第3節 調査に至る経過	7
第4節 調査の経過	8
第5節 普及活動	9
第2章 遺構	10
第1節 墳丘	10
第2節 埋葬施設	14
第3章 まとめにかえて	22
引用参考文献	24
写真図版	25

挿図目次

第1図 調査地位位置図	1	第11図 墳丘推定図	13
第2図 袋井市周辺地質図	2	第12図 第1主体部遺構実測図1	15
第3図 周辺遺跡分布図	4	第13図 第1主体部遺構実測図2	16
第4図 団子塚古墳群調査地点図	7	第14図 第1主体部遺構実測図3	17
第5図 団子塚古墳群見取り図	8	第15図 第1主体部遺物出土状況実測図	18
第6図 試掘調査時石室確認状況	9	第16図 第2主体部検出状況	19
第7図 展示会開催案内	9	第17図 第2主体部遺構実測図1	20
第8図 調査前墳丘測量図	10	第18図 第2主体部遺構実測図2	21
第9図 墳丘測量図	11	第19図 第2主体部遺物出土状況実測図	22
第10図 墳丘土層断面図	12		

写真図版目次

写真図版1	写真図版8
1. 団子塚古墳群II-1号墳 遠景（東より）	15. 第2主体部玄室南側・玄門状況（奥壁より）
2. 団子塚古墳群II-1号墳 第1・2主体部完掘状況（南より）	16. 第2主体部玄室床面状況（南東より）
写真図版2	写真図版9
3. 団子塚古墳群II-1号墳調査前状況 遠景（南南西より）	17. 第2主体部根石全景（南より）
4. 団子塚古墳群II-1号墳調査前状況 近景（南南西より）	18. 団子塚古墳群II-1号墳墳丘断面（南より）
写真図版3	写真図版10
5. 団子塚古墳群II-1号墳 第1・2主体部完掘状況（直上より）	19. 第1主体部 遺物出土状況1
6. 団子塚古墳群II-1号墳 第1・2主体部完掘状況（南より）	20. 第1主体部 遺物出土状況2
写真図版4	21. 第1主体部 遺物出土状況3
7. 第1主体部全景（南より）	22. 第1主体部 遺物出土状況4
8. 第1主体部玄室床面状況（南東より）	23. 第1主体部 遺物出土状況5
写真図版5	24. 第1主体部 遺物出土状況6
9. 第1主体部玄室・奥壁状況（羨道より）	25. 第1主体部 遺物出土状況7
10. 第1主体部玄室南側・玄門状況（奥壁より）	写真図版11
写真図版6	26. 第2主体部 遺物出土状況1
11. 第1主体部根石全景（南より）	27. 第2主体部 遺物出土状況2
12. 第1・2主体部根石全景（西より）	28. 第2主体部 遺物出土状況3
写真図版7	29. 第2主体部 遺物出土状況4
13. 第2主体部全景（南より）	30. 第2主体部 遺物出土状況5
14. 第2主体部玄室・奥壁状況（羨道より）	31. 第2主体部 遺物出土状況6
	32. 第2主体部 遺物出土状況全景

第1章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

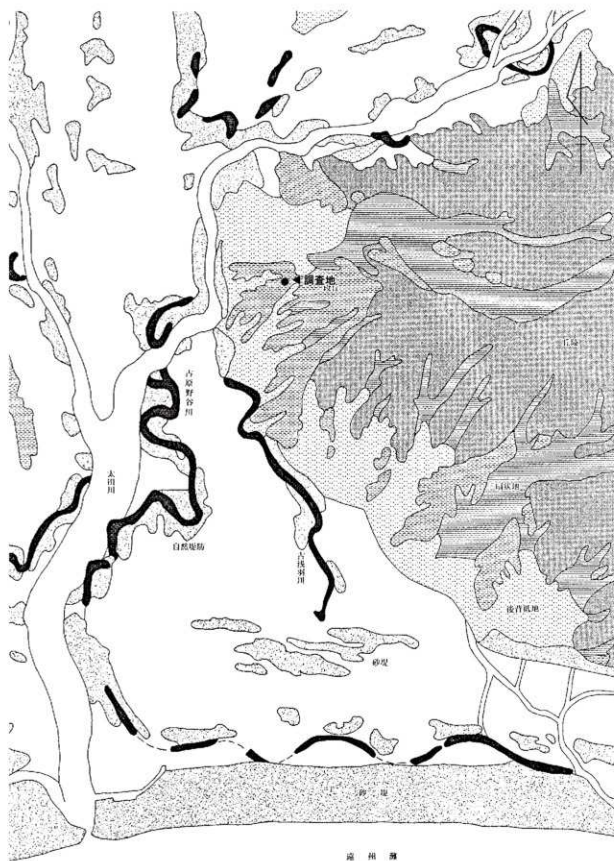
袋井市は静岡県西部に位置し、遠州灘に臨んでいる。市域の北東から西側にかけて斜めに太田川が南流し、中央部では掛川市より西流してきた原野谷川がその流れを大きく南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。市中央部で原野谷川が流れを南側へ変える地点の北側には旧東海道宿場町として発展した袋井地区、そして南側にはJR東海道本線袋井駅を中心に栄えた高尾地区が位置し、その南側に諸井地区はある。太田川、原野谷川の両岸に広がる沖積地は袋井市北部、中央部の穀倉地帯となっている。市南部の東側には小笠山丘陵が位置し、市域に含まれる西山麓では小笠沢川や弁財天川、三沢川などの小河川によりやや大きな谷が形成されている。尾根の支稜裾はさらに細かく開析され、浅く短い支谷と尾根が複雑に入り組んだ地形を呈し、縄文時代の集落遺跡である長者平遺跡や大畑遺跡が確認されている。

団子塚古墳群が立地する諸井地区の小笠山麓西麓段丘上は、多くの古墳が見られたことから、「団子塚」と呼ばれている。『浅羽町史』（1997浅羽町）には「字名には団子塚の名は無く、地元の通称であり、その範囲もはっきりしない」との記載がある。原田和氏による1947年の現地踏査記録を『浅羽風土記』（1957原田和）に見ると、標高41.3mの三角点の載る古墳（今回調査地）周辺のみを団子塚と呼称していたようである。小高い丘の上に調査対象古墳も含め、23基の古墳が所在していたことが図示されている。

調査地付近での近年の開発による地形改変は著しく、現在では旧地形を想像することは難しい。土地所有者による開墾により茶園化したため消滅した古墳も多く、墳丘が確認できるものは調査したH-1号墳以外には供養碑の立つ古墳1基のみとなった。開墾時に出土した遺物には東京国立博物館に寄贈されているものや土地所有者が保管（『浅羽町史』掲載資料）するものがある。



第1図 調査地位図



第2図 袋井市周辺地質図 (1/150000「五ヶ山B2号墳」報告書掲載図に加筆)

団子塚古墳群は旧袋井市と旧浅羽町の合併以前は、旧袋井市側の高尾向山古墳群・響ヶ谷古墳群と旧浅羽町側の北山古墳群というように、ある程度のまとまりごとに別称で認識されていた。1990年から旧袋井市と旧浅羽町によって行われたゴルフ場建設に伴う調査において、一連の遺跡が同一遺跡であることが判明し、これに準じて上記の古墳群も同一の古墳群とした。

第2節 歴史的環境

小笠山塊西麓段丘上では長期間にわたる生活の痕跡が確認されている。後期旧石器時代や縄文時代の遺物が発見されているが、明確な遺構に伴うものはない。明確に生活拠点としての痕跡が見られるのは弥生時代中期以降で、温暖期から寒冷期へ移行していく時期と見られる。団子塚遺跡や高尾向山Ⅰ遺跡では弥生時代中期中葉の総数100基からなる方形周溝墓群が確認され、現在の高南地区（古高尾池）を挟んで北側にある掛之上・大門遺跡の住人の奥津城の地であったと考えている。掛之上・大門遺跡において弥生時代中期・後期の遺構数が増えることから、この段丘上には鶴松・徳光遺跡や坂尻遺跡に次ぐ規模の集落が営まれたと考えられる。

中期まで掛之上・大門遺跡の墓域と考えられている団子塚遺跡では、後期になると中期の墓域に重複して集落が出現する。掛之上遺跡を墓域として大門遺跡が居住域となった時期もある。また、この段階で北原遺跡でも集落が営まれ始め、団子塚・北原遺跡の墓域は、居住域からやや離れた高尾向山遺跡の方形周溝墓群と考えると、この時点で拠点集落であった掛之上・大門遺跡から団子塚・北原遺跡が分村したと考えることもできる。このような集落の拡大、分村という動きは、太田川水系下流域の低地における十二所遺跡群や鶴松遺跡群の成立と発展、掛川市和田岡丘陵遺跡群の集落が後期に丘陵部へ進出する動きと同一の現象と考えられる。

袋井市周辺では河川規模の小さいことから、形成される沖積平野が狭く、自然堤防等の微高地の発達も顕著ではない。掛之上・大門遺跡や愛野向山遺跡のような段丘や低位の丘陵上に立地する集落とともに、一色前田遺跡や掛川市八景山遺跡、森町片瀬城遺跡のように環濠をもつ丘陵上の集落が現れる。しかも三沢Ⅳ遺跡のように環濠をもたない丘陵上の集落も現れる。西遠江の後期集落のほとんどが環濠集落であるのに対し、袋井市内は平野部の鶴松・徳光遺跡では環濠らしい溝が見られるが、大多数の集落遺跡では環濠は造られることなく対照的である。この2世紀後半ごろから3世紀にかけて、県内でも遺跡数が急増していることが確認されており、平野部は概ね水田化したのではないかと考えられ、台地や丘陵上へ集落が進出する時期でもある。

弥生時代中期に温暖化していた気候も、古墳時代には寒冷期へと移行する。時代は気候変動に呼応するかのように国家形成のための胎動期へと移行していく。縄文時代のような原始共同体は全面的に解体となり、稲作を生業とする新たな村落共同体が形成される。その共同体間の富の蓄積の差などからくる力の不均等を背景に、政治的統合が進み、その集団の長の埋葬施設として巨大墳墓（古墳）が出現するのは日本に限ったことではない。

西暦113年頃から732年までの移行期から寒冷期によって生じた海面低下（海退）に伴って、内陸へ大きく入り込んでいた内海が後退し陸地化した。原野谷川やその支流が少ない標高差から蛇行を繰り返すことによって、平野部中央の河川兩岸に自然堤防が造られ、現在見られる南北に長い微高地の形成となった。古墳時代前期に自然堤防上へ進出した集落（新堀・青木・西向・十二所遺跡）が確認できるが、首長の一族の墳墓を特定することはできていない。『浅羽町史』通史編に「古浅羽川流域を中心とした集落は、経塚、稲荷山、松林山古墳などの磐田市鎌田・新貝地区に築造された前期古墳と関係していたと考えて何の支障もない」と説明する。

調査地付近の状況を見ると、太田川の上流右岸、磐田原台地東縁で弥生時代の墳墓群を伴う新豊院



- | | | | |
|--------------|-------------|--------------|-------------|
| 149 三門遺跡 | 167 丸尾氏館 | 200 長者平古墳群 | 279 弘法堂古墳 |
| 150 御所森古墳 | 168 大門Ⅱ遺跡 | 201 長者平遺跡 | 280 貫名地遺跡 |
| 151 掛之上遺跡 | 173 金山横穴群 | 206 東端遺跡 | 281 五ヶ山古墳群 |
| 152 狐塚古墳 | 177 金山遺跡 | 255 袋井遺跡 | 282 高道遺跡 |
| 153 手持勾玉採集地 | 178 金山古墳群 | 256 柳原遺跡 | 283 浅羽氏館跡 |
| 154 小野田遺跡 | 179 愛野向山Ⅱ遺跡 | 257 高尾向山Ⅰ遺跡 | 286 馬伏塚城跡 |
| 155 能光寺古墳 | 180 愛野向山横穴群 | 269 北山遺跡・古墳群 | 305 楠宮遺跡 |
| 157 大門遺跡 | 181 愛野向山古墳群 | 270 北原遺跡 | 306 諸井大学院遺跡 |
| 159 大門大塚古墳 | 188 関口遺跡 | 271 王子遺跡・古墳群 | 307 浅羽北原遺跡 |
| 160 地蔵ヶ谷遺跡 | 189 加賀爪氏館 | 272 山畑遺跡・古墳群 | 308 明音寺中世墓 |
| 161 地蔵ヶ谷横穴群 | 190 谷坂古墳群 | 273 貫名地古墳群 | 309 原添遺跡 |
| 162 地蔵ヶ谷古墳群 | 191 高尾向山Ⅱ遺跡 | 274 平芝陣屋跡 | 316 諸井新屋遺跡 |
| 163 井守塚古墳群 | 192 団子塚古墳群 | 275 平芝遺跡 | |
| 164 大門山古墳群 | 193 団子塚遺跡 | 276 浅間神社古墳 | |
| 165 洪垂神社上古墳群 | 194 高尾向山古墳群 | 277 諸井十二所遺跡 | |
| 166 堂下遺跡 | 195 雲座古墳群 | 278 諸井十二所居館 | |

第3図 周辺遺跡分布図

山D2号墳（磐田市向笠）の造営が始まる。その後、磐田原台地東西の縁には数多くの古墳が築かれることから、『先代旧事本紀』にいう遠淡海（遠江）国造か久努国造の奥津城の地であったと見られる。

遠淡海国造は久努国造より前時代に置かれた。その本拠地は久努より西側に位置し、律令期の国名と一致していることと、律令期の国府や遠江国の鎮守・総社の淡海国玉神社の鎮座地などから磐田原台地南部と考えられている。その名である遠淡海（遠江）は、現在は見ることができない磐田市南部の大浦とも『静岡県史』は説明している。久努国造一族の系譜については、『国造本紀』と『天孫本紀』で伝承を異にしている。原秀三郎氏は『袋井市史』通史編の中で、遠江国造が成務朝、久努国造が仲哀朝、そして素賀国造は物部氏と蘇我氏の抗争の産物であり、物部氏系の久努の国に対応して蘇我氏によって擁立された可能性が高く「その時期は、物部守屋が蘇我馬子に滅ぼされた五八七年以降、あまり遠くない時期」と説明している。また、向坂鋼二氏は『静岡県史』通史編において、「古墳群が、単位群→小支群→中支群→大支群と言うように、ピラミッド形の構成をとる」状況から、遠江の古墳群（横穴群も含む）を水系等により8グループに大別し、磐田原台地西南部の古墳群（磐田原南中支群：約40基）を遠淡海国古墳群、太田川流域（南部）の古墳群（山名北大支群・磐田原東大支群・山名南大支群：約870基）を久努国古墳群、原野谷・逆川流域の古墳群（佐野西大支群・佐野東大支群：約1,260基）とし、地域的勢力圏としてのまとまりから国造と古墳群の関係を述べ、「クニ」と意識されていたような政治的権力の存在を説明している。

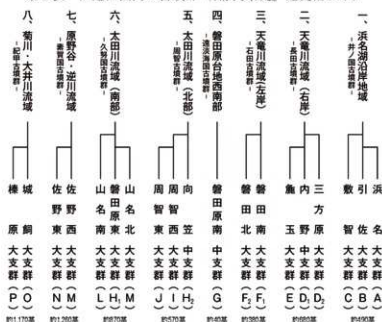
古高尾池南東側丘陵上の古墳群は、大まかに見れば、最も東側の雲座古墳群から始まり、5世紀後半～6世紀前半期に高尾向山古墳群、6世紀前半～8世紀前半期に団子塚古墳群、7世紀後半から北山古墳群・谷坂古墳群・山畑古墳群・王子古墳群の順に築造されたと考える。特に団子塚古墳群では、木棺直葬墳から始まり横穴式木室墳・H-1号墳同様の横穴式石室墳と続く。もっとも多くの古墳が築造された時期は6世紀後半期で、大化の薄葬令発布以後も築造が続けられ、8世紀前半期に終焉を迎える。その後、当地は律令国家の枠の中に組み込まれていったと見られる。

当地が『和名類從抄』に記される遠江国の何郡に属していたかについては記録が残されていない。新堀遺跡から出土した「山名厨」と墨書された須恵器、平城宮から出土した「遠江国山名郡中男作物堅魚十斤天平十七年□月」と記された木簡などから、山名郡が海に面していたと考えられる。袋井南

部が山名郡であったと推定もされている。また、袋井市南部の多くは、『和名類從抄』に「幡多（判多）郷」「貫名（奴木名）郷」が見られるように、現在の浜松市南東部から海岸線沿いに長く広大な長田郡（和銅2（709）年以降は分割され長下郡）に含まれていたと論じている（袋井市史通史編）。しかし、現段階では結論が出ないのが現状である。

団子塚古墳群の詳細な状況を見ると、「袋井町高尾向山団子塚古墳出土」の六鈴鏡は5世紀後半に遡るもので、この時期より当地での古墳の築造が始まったと『浅羽

第1表 旧遠江国内の古墳群（『静岡県史』通史編より）



町史』通史編は説明する。木棺直葬のC-5号墳と挂甲や馬具等が出土したC-9号墳は6世紀前半の造営で、横穴式木室を持つG-1～3号墳(2001年調査)・C-10号墳・A-4(北山4)号墳が6世紀後半、横穴式石室のC-1～3号墳が6世紀後半～7世紀前半、C-4号墳が7世紀中、横穴式木室墳のA-1(北山1)号墳～A-3(北山3)号墳の4基とD-1・D-2号墳が6世紀末～7世紀前葉の造営と考えられる。そして、横穴式石室を埋葬施設とする古墳へと推移し、C-6号墳第2主体部被葬者、C-7号墳第3主体部被葬者の8世紀前半まで連綿と造営が続いてきた。この古墳群は木棺直葬主体部を持つ2基があるC地点中央部から始まり、横穴式木室墳が尾根西端のA地点4基及びG地点4基、中央部のD地点の2基、横穴式石室墳のC地点6基、G地点4基、H地点1基と続く。8世紀代に入ると単独墳の造営が無くなり、石室への追葬や既存の墳丘へ主体部の付け足しへと移行している状況が確認できる。

第2表 団子塚古墳群一覧

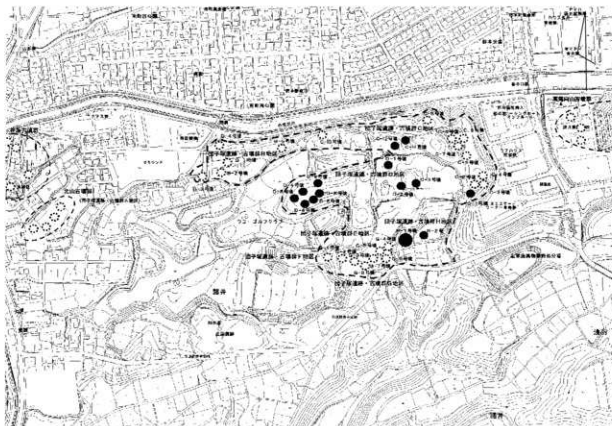
団子塚古墳群 地区名	古墳番号	調査 有無	現残存 状 況	墳形	主体部状況	築造時期
A地区	1号墳 北山1号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀末～7世紀前
	2号墳 北山2号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀末～7世紀前
	3号墳 北山3号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀末～7世紀前
	4号墳 北山4号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀末～7世紀前
B地区	1号墳 H2A-SG13	済	消滅	円墳	不明	6世紀後
	2号墳 H2A-SG14	済	消滅	円墳	不明	6世紀後
	3号墳 H2A-SG15	済	消滅	円墳	不明	6世紀後
	4号墳 H2A-SX09	済	消滅	円墳	不明	不明
	5号墳 —	未	消滅	円墳?	不明	不明
C地区	1号墳 H2F-1号墳	未	消滅	円墳	横穴式石室?	6世紀後～7世紀前
	2号墳 H2F-2号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀前
	3号墳 H2F-3号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀前
	4号墳 H2F-4号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀中
	5号墳 H2F-5号墳	済	消滅	円墳	木棺直葬	6世紀前
	6号墳 H2F-6号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀初
	7号墳 H2F-7号墳	済	消滅	円墳	横穴式小石室	7世紀末～8世紀前
					横穴式石室	7世紀中
					横穴式石室	7世紀末～8世紀初
					横穴式石室	8世紀前
	8号墳 H2F-8号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀中
	9号墳 H2F-9号墳	済	消滅	円墳	木棺直葬	6世紀前
	10号墳 H2F-10号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後
	11号墳 H2A-SG11	未	残	円墳	不明	不明
	12号墳 H2A-SG12	未	残	円墳	不明	不明
D地区	1号墳 H8A-1号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀～7世紀
	2号墳 H8A-2号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後～7世紀
	3号墳 —	未	残	円墳	不明	不明
	4号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
	5号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
	6号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
	7号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
	8号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
	9号墳 —	未	残	円墳	横穴式石室?	不明
E地区	—	—	—	—	—	—
F地区	—	—	—	—	—	—
G地区	1号墳 H13A-3-1号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後
	2号墳 H13A-3-2号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後
	3号墳 H13A-3-3号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後
	4号墳 H16A-4-1号墳	済	消滅	円墳	横穴式木室	6世紀後
	5号墳 H16A-4-2号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀
	6号墳 H16A-4-3号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀
	7号墳 H16A-4-4号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	7世紀
	8号墳 H16A-4-5号墳	済	消滅	円墳	横穴式土坑墓	7世紀
H地区	1号墳 H24F-H1号墳	済	消滅	円墳	横穴式石室	6世紀後
					横穴式石室	7世紀前
					横穴式石室	7世紀中
	2号墳 —	未	残	円墳	不明	7世紀前

第3節 調査に至る経過

袋井市諸井地内の丘陵上にの古墳の存在はかなり古くから知られていた。開墾で多くの古墳が失われたが、これまで和光商事株式会社によるゴルフ場建設事業や温泉施設建設事業等により大規模な面積の発掘調査が実施され、資料の蓄積のある地域でもある。

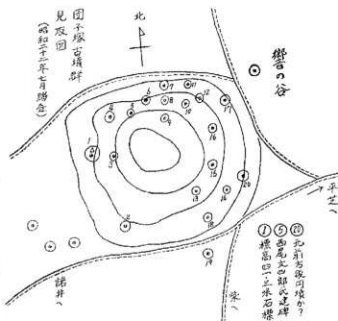
平成2年(1990)から行われたゴルフ場建設に伴う調査において団子塚遺跡の調査区呼称が決定された。旧浅羽町教育委員会による調査報告書『「団子塚遺跡(Ⅰ)」1992 浅羽町教委』に従い地区呼称する。本調査対象である三角点の載る古墳はH地区に含まれ、全地点で最初の発掘調査であることから1号墳とした。

団子塚遺跡・古墳群の調査履歴を見ると、旧浅羽町教育委員会による北原遺跡での調査が最も古い。昭和61年(1986)12月22日から昭和62年(1987)3月31日まで発掘調査が行われ、弥生時代の竪穴建物(当時は住居と呼称)21棟・掘立柱建物5棟、古墳時代前期の竪穴建物1棟、横穴式石室の堀方状の土坑1基等と弥生土器を多数確認した。団子塚遺跡としての第1次調査は旧浅羽町教育委員会が平成2年(1990)5月1日から平成3年(1991)3月31日の期間で、B・C・E・F・G地区の調査を行ない、旧袋井市教育委員会が平成2年(1990)4月1日から平成3年(1991)3月31日の期間でB・C地区の調査を実施した。B地区では古墳3基(旧称2号墳:B-1・2号墳)他、C地区では古墳11基(C-2~12号墳)と調査区外の古墳1基(C-1号墳)及び弥生時代集落や墳墓が調査されている。その後、旧浅羽町教育委員会は団子塚古墳群第2次調査としてD(D')地区の古墳2基(D-1・2号墳)を平成8年(1996)4月17日から7月17日に調査した。第3次調査は平成13年(2001)9月20日から平成14年(2002)1月31日の期間でG地区を対象に調査が行われ、4基(G-1~4号墳)の古墳を確認した。第4次調査では第3次調査区の東側において、平成15年(2003)2月3日から3月31日の期間で、5基(G-5~9号墳)の古墳が調査されている。現在、H地点にはH-1号墳以外には供養塔の載る古墳1基のみが残されている。



第4図 団子塚古墳群調査地点図

和光商事株式会社（代表取締役 芝田俊行）よりH-1号墳が所在する土地の開発に向けての相談があり、現地確認調査の依頼を提出していただくように伝えた。平成24年（2012）1月25日付けて試掘調査の依頼書の提出を受けて2月17日に試掘調査を実施した。墳頂部の三角点標識を除けて、その東側に南北方向のトレンチ（3.0×0.6m）、石標の北側に東西方向のトレンチ（0.6×2.0m）を設定し遺構の残存状態を確認した。また、墳丘北側及び北東側にそれぞれトレンチを設定し、古墳周囲の遺構を確認した。墳頂部のトレンチでは石室の一部を、墳丘裾には溝状の落ち込み（本調査の結果、周溝等の遺構は無かったことを確認する）を検出した。この調査結果を受けて、袋井市教育委員会は和光商事株式会社と協議し、発掘調査に全面的な協力を約束していただいた。



第5図 団子塚古墳群見取り図（原田和氏1947作成）

発掘調査は平成24年（2012）11月13日～平成25年（2013）3月31日の期間とし、遺構の測量及び調査区全景写真等は株式会社フジヤマが実施した。

調査方法は、調査地区全体をバックフォーにより客土の除去し、ジョレン等により墳丘の検出を行った。現地図面は1/100縮尺、石室は1/10縮尺で実測を基本とした。記録写真はブローニサイズ原画（白黒及びカラー）と35mmサイズ原画（カラー）を使用した。

第4節 調査の経過

平成24年（2012）11月中旬に調査区内の樹木の伐採と現状地形測量を、12月3日に現地事務所などの設置を行う。同日、重機により調査区内の表土除去を開始し、試掘調査にて検出した主体部の西側に集石遺構を確認する。後の遺構確認作業によりこの集石遺構は第2主体部（西主体部）であることが確認されるが、この段階では天井石と側壁の一部であることは判明していなかった。

その後、発掘機材を現場事務所に運び込み、本格的な発掘調査の準備を行う。6日より作業員を動員して墳丘上から樹木の根や茶畑の攪乱の除去作業を開始する。当初確認されていた石室（第1主体部）は良好に保存されていると考えていたが、石室入口付近では樹木の根により破損が進んでいた。また、天井石の一部は失われており、残存するものも石室内に落ち込み原位置をとどめていない。

10日からは攪乱部分の除去とともに東主体部の掘削作業を開始する。後世の盗掘坑と見られる掘り込みによって天井石や石室側壁頂部付近の遺存状況は悪く、側壁頂部の石は持ち去られており、残された円礫のみでは石室の旧状を復元することは難しい。当初想定していたより遺存状態が悪い状況であったため、石室内に充填している土の除去を優先して行った。旧状を失っていると見られる遺物位置の特定を目的に、石室内を便宜的に6分割し掘り下げを開始した。石室内の埋土を除去していく中で、19日までに石室の閉塞施設の残存状況も悪いことを確認した。石室中央部で天井石と見られる大型の円礫を検出したため、重機により石室外へ搬出する。土砂を除去すると、石室側壁の下半が良好に残存している状況と左側の立柱石内側で大型瓶と馬具（鞍金具）の破片を検出した。



第6図 試掘調査時石室確認状況（北より）

21日には石室内の掘削と西側集石遺構の検出作業を始める。25日から27日に集石遺構が新たな石室であることを確認した。そのため、その位置関係から東側の石室を第1主体部、後に確認された石室を第2主体部と呼称することとし、平成24年内の作業を終了する。

平成25年（2013）は1月7日から作業を開始し、両石室の掘り下げを並行して行う。第2主体部の床面直上で金属製遺物（大刀）及び土器を確認し、実測と写真撮影を9日から行った。第1主体部では奥壁付近から金属製遺物（銅剣・耳環）が、また、右側立柱石付近で土器が重ねられた状況で出土した。両石室とも11日までに完掘した。両石室は比較的大きく扁平な川原石の根石の上に、やや小ぶりの川原石を小口積みして造られたものであることが明らかとなった。副葬品の出土位置から被葬者は第1主体部に2人以上、第2主体部に1人であることが判明する。

15日から出土遺物の実測と写真撮影を行う。17日から（株）フジヤマにより石室の実測を開始する。終了後、構築状況を確認するために墳丘の解体を開始し、東西方向横断面、石室を通る縦断面を製作する。第1主体部の床石を取り外す中で、さらに1組の耳環を検出した。地山直上まで墳丘盛土の除去を行い、石室構築のための掘り込み坑を検出する。当初予定から遅れたが3月13日で現地調査を終了する。

現地調査に並行して2月12日から出土遺物の洗浄と接合等の資料整理を行うとともに、石室内を埋めていた土のふろい掛け作業を行い、数点の玉類・琥珀玉を確認した。鉄製品には腐蝕防止用の樹脂を塗布し、大まかな錆の除去作業を行う。その過程で馬具と見られていた鉄製品一括取り上げ遺物の中に、両頭金具が複数点含まれていることを確認した。儀仗用の弓飾りであろう。末弭金具と本弭金具の出土は無い。総数10点と検出数が多く、H-1号墳の特殊性を示していると考えられる。並行して現地で作製した図面と写真の整理作業と須恵器の実測作業を開始する。

第5節 普及活動

埋蔵文化財の保護においては、現地保存や発掘調査による記録保存とともに重要なことは、遺跡等に関する情報を市民に公開し、その価値を知ってもらうことである。そのために普及活動の実施が不可欠であると考え、調査概報を平成25年3月31日付けで発行する。また、袋井市立浅羽図書館展示室を会場として平成26年（2014）10月1日～11月13日の期間で写真パネル・出土遺物展示会を開催した。会場では展示解説パンフレットを配布を行い、展示会開催期間内で袋井市役所浅羽支所及び浅羽図書館周辺を会場に行われたイベント「ふれあい夢市場」

（11月8日）開催時に調査担当による展示解説を実施し普及に努めた。



第7図 展示会開催案内

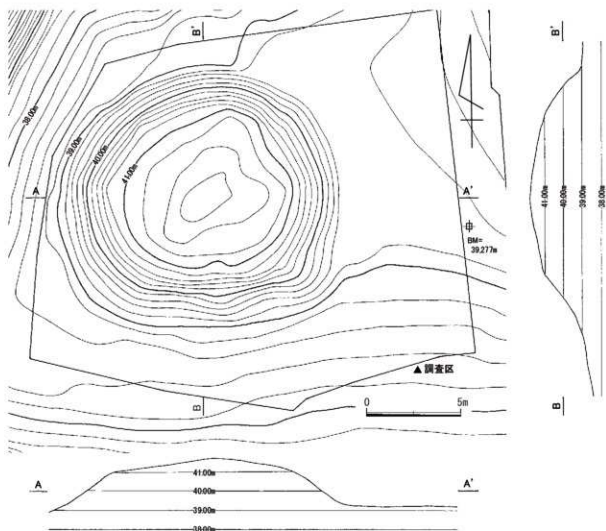
第2章 遺構

第1節 墳丘

1. 墳丘の状況

団子塚古墳群H-1号墳の立地する袋井市諸井字北山地区は、小笠山丘陵西麓の浸食が進み、先端部は尾根状の地形となり、数多くの小谷が入り込んでいる。その尾根状地形の頂部は茶園として平坦部が造成され、斜面上に山林が残されている。平野部との比高差はおよそ20mで、北西側を一望できる場所にある。また、団子塚遺跡・古墳群が所在する土地の多くがゴルフ倶楽部を運営する民間企業所有の土地となっており、施設拡充の造成が行われる毎に調査が実施されてきた。

H-1号墳はその墳丘上に三角点が設置されていたことから、これまでの開発の波から残されてきた。墳丘周囲は近年まで茶畑として利用されており、墳丘も若干削られ旧状そのままではなかった。調査開始直前まで墳頂部付近には高木が茂り、茶園の中に残された古墳として知られていた。

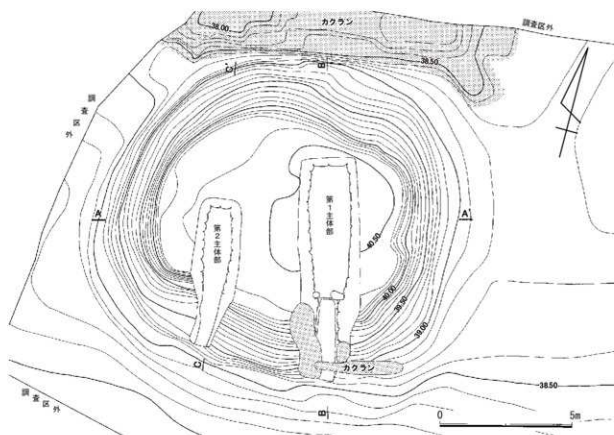


第8図 調査前墳丘測量図

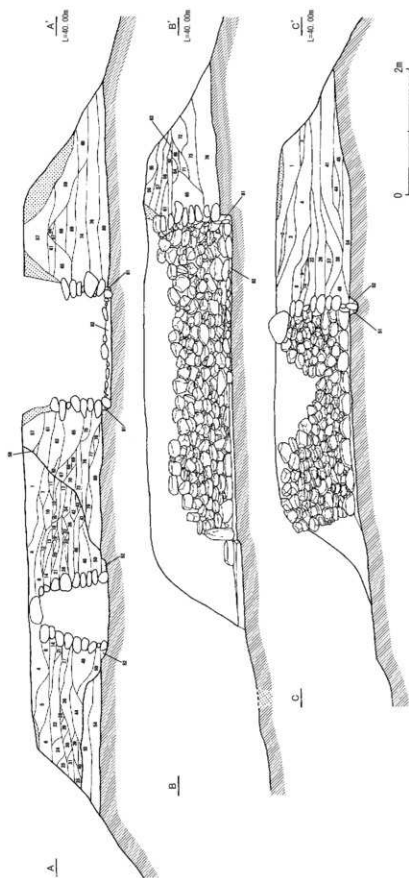
2. 墳丘の構造

H-1号墳は調査前の墳頂部標高が41.60mを測り、試掘調査によって横穴式石室をもつ円墳で、周溝を持つ可能性が高く、墳丘周辺に他に遺構は無い可能性が高いことが判明していた。表土の堆積厚(1.0m)も把握していたことから、時間的制約のために古墳以外の調査区内平坦地は重機により、墳丘上は作業員の手により表土除去作業を行った。その結果、周溝は確認することができず、試掘調査で周溝と見られた落ち込みは茶の木を植える際の掘り込みであることを確認した。また、主体部が東西2カ所(以下、東側主体部を「第1主体部」、西側主体部を「第2主体部」と呼称する)あることが判明した。墳丘は、C地区でこれまで調査された横穴式石室古墳と同様に丘陵の削り出しではなく、人工的に盛土されたもので、下層には方形周溝墓などの前時代の墳丘墓が無いことも明らかとなった。埴輪や葺き石などの外構施設もない古墳である。

墳丘の残存規模は東西16.0m、南北14.0m、高さ2.0mで平面楕円形を呈している。墳頂部は削平を受け、第1主体部の天井石及び側壁の上部が失われ、天井石の一部が石室内に崩れ落ちていた。また、第2主体部では奥壁付近に天井石1個が遺存していた。玄門付近の側壁と多くの天井石が失われており、石室の石を持ち去ることを目的とした盗掘が行われたことを示していると考えられる。



第9図 墳丘測量図



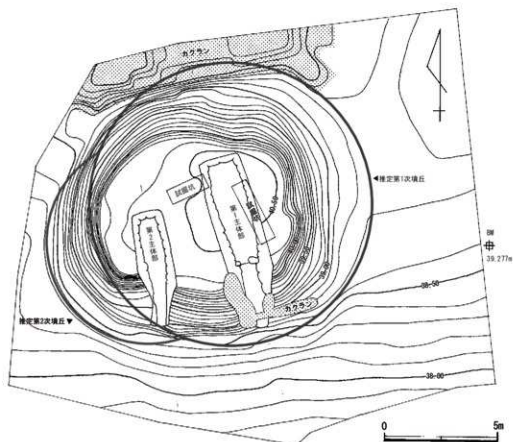
第10図 墳丘土層断面図

墳丘横断面の堆積状況から、第一段階として、第1主体部を中心とした円墳（第1次墳丘）が築造され、その後、墳丘の西側を削り第2主体部を設置した後に新たな墳丘（第2次墳丘）を造ったために墳形が楕円形を呈していたことを確認した。また、C-3・C-7号墳のように追葬により墳丘や主体部の付け足しが行われた古墳であることが判明した。

第1次墳丘は推定直径13.7mの円形で、中央に南向きに第1主体部が構築されている。第1主体部は地山を0.10m程長方形に掘り込み根石を据え、墳丘の基底部として主体部を囲むように0.35mの盛土を東側から行った後に側壁を積む。第二段階として側壁を構築するために墳丘より小ぶりの直径6m程にCの字型の堤状に積み上げる。側壁を積み上げてC字状堤の間に裏込め土を充填し、主体部を囲むC字型の堤状に盛られた土の外側に土を積み上げ墳丘を形成する。第三段階で幾重にも水平に盛土し、壁体をさらに高く積み上げる。次に天井石を据えた後に墳丘上部を構築したと推定されるが、天井石より上は遺存していないため想像の域を出ない。

第1主体部に最初の被葬者を埋葬した後と考えるが、第1次墳丘西側の一部を削り取り、第2主体部を第1主体部中心線から2.1m西側に主軸方向をN-11°-Eで構築されている。第2主体部は第一段階として第1主体部の時と同様に地山を0.1m程長方形に掘り込み根石を据える。第二段階として側壁を据えながら盛土が行われる。第2主体部は側壁を一段積み毎に盛り土を行い墳丘を成形する。第三段階で第1次墳丘との間や西外側にさらに盛り土して、直径10.2mの第2次墳丘が増築される。

その後、第1主体部に追葬が複数回行われ、第1主体部の閉塞施設がそのつと直されたと考えられる。また、C地区では方形周溝墓のマウンドを利用して古墳が築かれている例が見られるが、H-1号墳の下層で前時代の遺構を確認することはできなかった。また、墳丘周囲からも前時代の遺構・遺物は検出されることなく、西側のG地区で見られる方形周溝墓群はH地区へは及んでいないと考えられる。



第11図 墳丘推定図

第2節 埋葬施設

1. 第1主体部

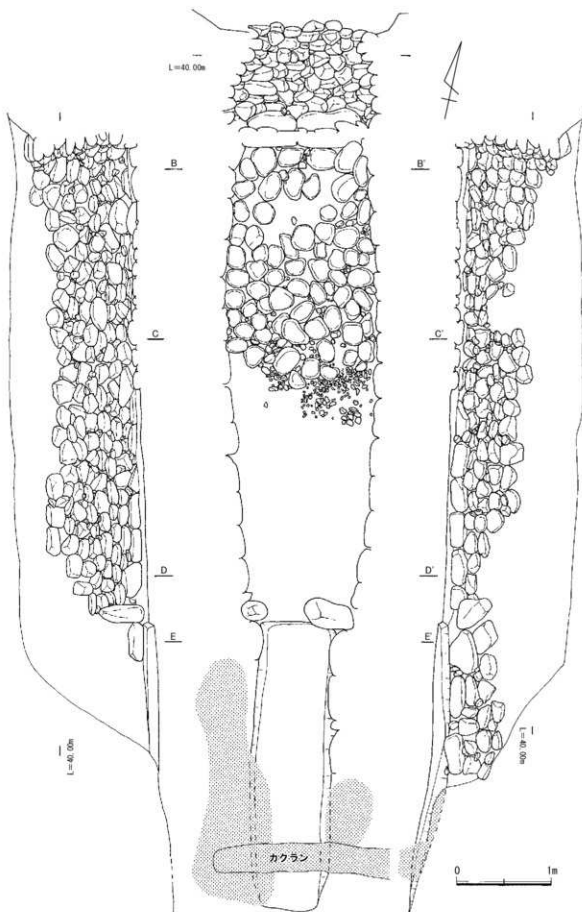
本古墳の埋葬施設は横穴式石室である。墳丘の構造説明において触れたが、墳丘内には2基の主体部が構築されており、第1次墳丘とともに構築された東側主体部を第1主体部と呼称し、第2次墳丘構築時に構築された西側主体部を第2主体部と呼称する。

第1主体部は、試掘調査により墳丘上面は後世に大きく削平を受け、天井石が失われていたことは判明していたので、墳頂部の表土を除去後、石室堀方の検出から調査を開始した。第1主体部は表土直下で検出され、墳丘を構築しながら造られたため平面的把握が困難であった。墳丘の東西方向の中心からやや東側に寄っており、西側より確認された集石状遺構が第2主体部であると判明するまでは楕円の墳丘形状に困惑を覚えながら精査と検出を行った。

第1主体部は全長7.90m最大幅1.60mを測る規模を有し、やや胴張形で羨道と玄室の境に立柱石を両側に立てる疑似両袖式の横穴式石室である。玄室は0.1m地山を掘り込み造られている。羨道部の最大幅は0.70mを測り、茶園改植により削平を受け、残存長は1.40mである。玄門付近の側壁を除いて遺存状態は悪く、その全長は不明である。前庭部分は失われ、墓前祭などの遺構・遺物の状況も不明である。

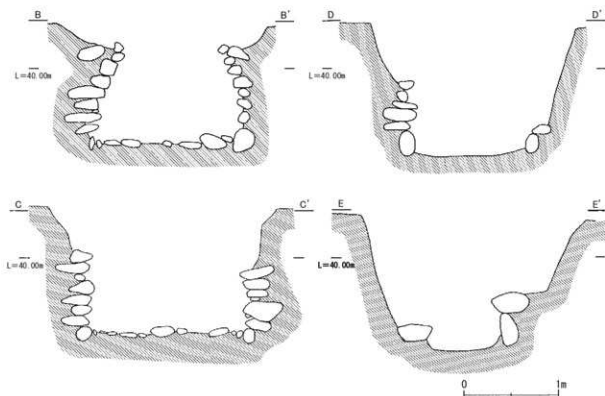
主軸方向はN-17°-Eを測り南南東を向いて開口するが、現在でも玄門から太平洋を望むことはできない。奥壁及び側壁の根石は大きめの礫を横方向に並べ、それより上段はやや小ぶりの円礫を小口積みとしている。側壁及び奥壁を構成している円礫は川原石で、加工されていないものを使用している。天井石に用いられていた大型の楕円礫は床面より0.1m上で発見された。玄室、羨道ともに天井石を失ってからと考えられるが、玄室内すべてが流入土で充たされている。それは震災などの自然災害や無理な構造で石室が築造されたための崩壊と考えるより、礫の持ち去りによって天井を失い、その後土が流入したと推定できる。玄室内の大型楕円礫より下層は、石室崩壊以前に堆積した流入土と考えられる。大型円礫より上層からの出土遺物は無い。

奥壁の残存高は1.10mで、幅は1.25m、側壁は左右とも全長4.80m、残存高は0.90mを測る。側壁はおよそ8割方が残存していたが、上部が失われ、天井石の架橋部は残存していない。石室内に落ち込んでいた天井石が1.00m×0.50mであるため、側壁は内側にせりだし、およそ12段程度で天井石を載せていたと考えられる。奥壁は鏡石などの大型石を用いるのではなく側壁と同様の工法で、玄室と羨道でも積み方の違いは無い。玄室内の壁はほぼ直線のだが、やや室内にせり出しぎみに積まれている。根石と玄門の立柱石以外の石材の大きさは長さ0.30～0.50m、高さ0.20～0.30mと比較的均質であり、特段大型の石材は使用されていない。石室に利用されている礫は、C地区の横穴式石室を持つ古墳と同様に川原石で、古墳のある丘陵から産出するものではなく、古墳造営のため持ち込まれたものである。側壁はわずかに弧を描き、玄室は胴張形の形状に構築されている（奥壁幅1.25m・玄室最大幅1.60m・立柱石内側1.05m）。玄室の床はほぼ水平で、C-3号墳同様に中央より北側に人頭大で扁平な円礫が敷き詰められている。そして中央部付近より南側で小礫が敷かれていたと見られる痕跡を検出した。玄室中心より東側の一部でしか小礫敷石を確認できないため、玄門付近まであったとは推定しにくい。また、玄室床面にはピットのような遺構は無く、羨道も同様である。両側の立柱石の間には根石などの境界施設は無いが、羨道部は玄室内より0.10m程掘りくぼめられていた。羨道右壁は根石が1個、左壁では遺存高0.50m、残存長1.60mで直線的で、玄門付近で最も残存していた南側でも同じ幅とみられる。また、立柱石は高さ0.50mで、その上部構造を推定できる痕跡は残されておらず、立柱石より南側の羨道部天井が構築されたかは不明である。追葬を確認したことから、玄室に埋葬者の棺を運び入れることができるような規模の出入口であったと想像される。

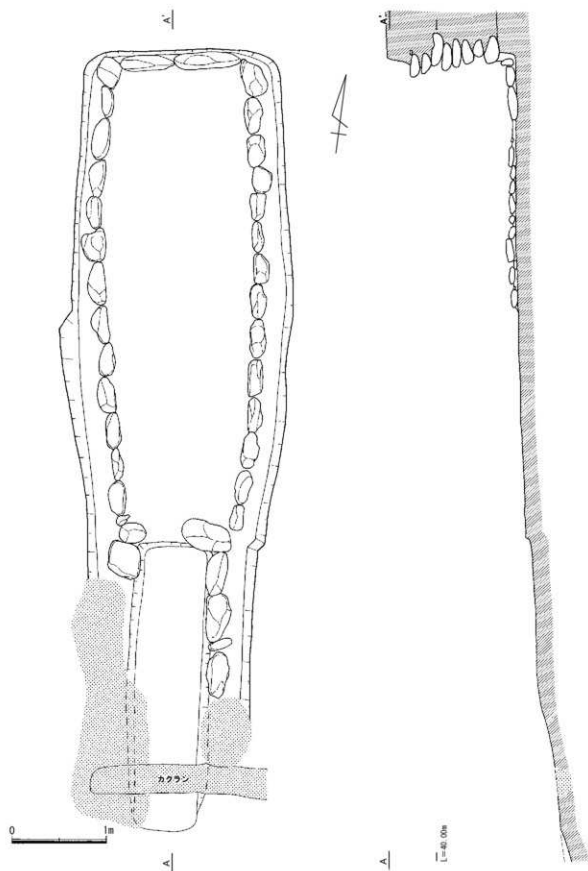


第12図 第1主体部遺構実測図1

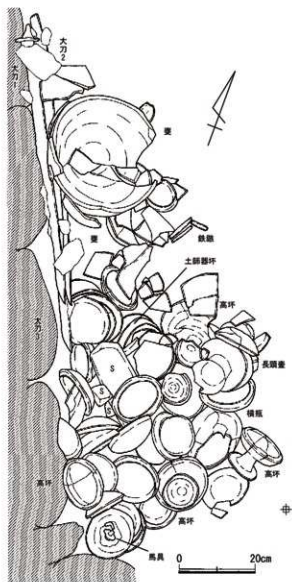
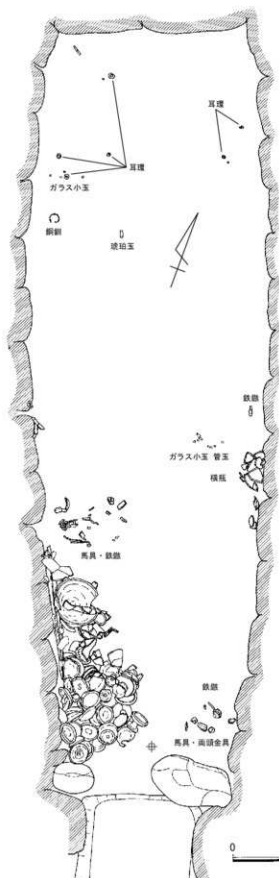
詳細は遺物編報告書に記述するが、石室内の床面直上より装身具・武器・馬具・土器が出土し、その状況から2回以上の追葬が確認できる。銅芯金貼りの耳環が2点1組で3組確認されている。土器類（須恵器・土師器）・大刀を立柱石近く石壁に寄せて積まれた状態で検出した。ほぼ一カ所にまとめられていた土器類を見ると、収納箱のようなものに格納されていた状況ではなく、立柱石近くに積み重ね寄せられたと推定できる。環類は東西方向で3列、南北方向に5列に重ね、その東側に甕と長頸壺、北側に2点の甕を並べ、甕と右壁の間に大刀が置かれていた。馬具と両頭金具、鉄銚を土器が集積している地点のすぐ北側から集中して検出したため、第一被葬者の木棺足元付近に置かれたとみられる。鞍は宇洞ヶ谷横穴出土の鞍に酷似した形状で、木質部を失った後に金具が拉散し玄室内南側の様々場所から出土した。磯の緑金具のみ遺存しているが、完形に復元できるような状況ではなかった。磯金具は鉄製で約幅6mm、厚さ2mmを測り、金銅板を被せた後、鉾が打たれている。後輪の鞍も一対確認された。また、発見された鉄脚の形状から磯の幅が20mm以上であったと推定できた。環状鏡板付轡や力帯か力草の鉸具等の馬具とともに、鐙か鞍・胡鐙の金具と考えられる二列の鉾が打たれた金具を検出した。弓関係の遺物としては鉄銚・両頭金具が確認されている。両頭金具は10点と数が多く、貴金具と革金具の出土は無い。左側立柱石付近からは大型の甕と鞍片が確認された。また、礫敷上から確認された第一被葬者の銅芯金貼りの耳環2組、片手分の銅鋼1点、ガラス小玉、琥珀玉、刀子も玄室の中心より右壁側に寄っていることから、玄室西側奥に置かれたと見られる棺内に副葬されたものであろう。



第13図 第1主体部遺構実測図2



第14図 第1主体部遺構実測図3



土器集中部拡大図

第15図 第1主体部遺物出土状況実測図

また、礫床のある部分で中心より東側でも1組の銅芯金貼り耳環とガラス小玉などの装身具を検出しことから、第二被葬者の副葬品と推定した。中央左壁側で小礫による礫敷が遺存していた空間からもガラス小玉、緑泥片岩製管玉等の装身具を確認した。第三被葬者の副葬品と推定できることから、追葬が2回行われたと推測する。

第1主体部は奥壁側に2基の木棺が納められ、左立柱石北側に1基の木棺を納める際に土器類を右立柱石付近に積み片付けを行ったと出土状況から想定することも可能であろう。

2. 第2主体部

第2主体部は第1主体部より比較的良好的な状態で残る無袖式横穴式石室である。石室の規模は、全長（現存）5.90m、玄室の最大幅は1.0m、羨道部の最大幅は0.6mを測る。奥壁の高さ（現存）1.1m、奥壁幅0.9m、左壁は全長3.3m、壁高さ1.2m、右壁は3.4m、壁高さ1.1mを測る規模である。

主軸方向はN-11°-Eを測り南南東を向いて開口するが、第1主体部同様に玄室からは太平洋を望むことはできない。石室の構築方法は第1主体部と同様で、墳丘築造時に石室も構築していく方法である。根石のみ比較的大きい扁平な川原



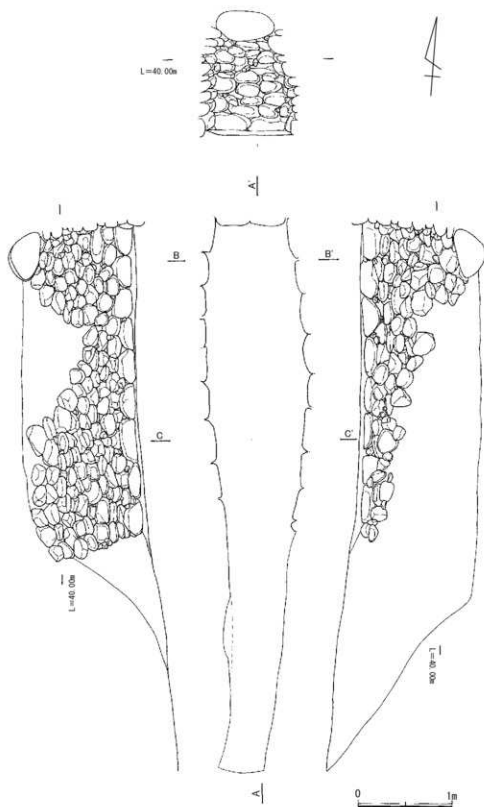
第16図 第2主体部検出状況

石を横口積みしている。二段目から壁にかかる力を考慮し少し小ぶりの川原石を小口積みしている。奥壁上部には天井石（0.50m×0.65m×0.35m）1個が原位置に残り、天井石の架構構造が確認できた。第2主体部は第1主体部より横幅が狭く小規模なため、天井石も大きなものは使用されていなかった。天井にかかる天井石以外はすべて失われている。盗掘は受けていないと見られるが、天井石は持ち去られ、天井部が失われてから玄室内に土が流入したと考えられる（遺存していた天井石直下では若干の空間が確認できた）。床面に礫敷は無い。

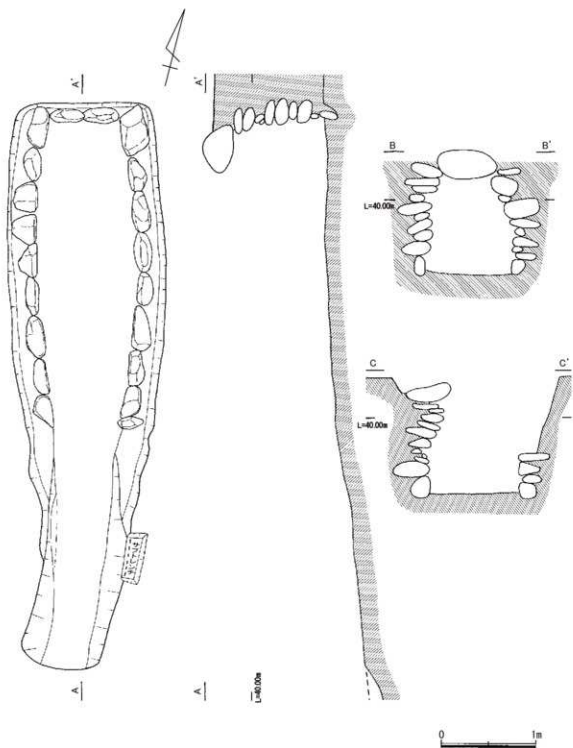
玄室と羨道の境には立柱石・榎石などの施設は無い。羨道の壁は無く円礫は積まれていない。羨道の床は玄室の床から連続し、南に向かい傾斜している。閉塞石などの封鎖施設も確認できなかった。

立柱石付近の床面直上で副葬品が出土した。右壁側に須恵器坏身・坏蓋と鉄鏃が置かれ、左壁付近には土師器坏身・脚付長頸壺・鉄鏃・甕・提瓶の順番で奥へ向けて並んでいる状況が確認された。葬送儀礼で使用したままの原位置と考えられる。玄室中央付近左壁側で大刀、玄室奥の中心線より右壁側で象眼装飾を鐫に施した大刀と2点1組の銅芯金貼りの耳環・丸玉・緑泥片岩製管玉・瑪瑙製勾玉・ガラス小玉の装身具、奥壁付近西壁側よりガラス小玉・水晶製切子玉を確認した。武器類は大刀が2口確認でき、床面に大刀片が散乱していた。

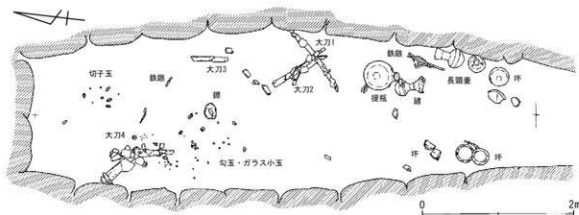
耳環の位置から、被葬者を納めていた木棺は玄室中心線よりやや右壁側に置かれており、釘や鏃の出土が無いことから、第1主体部同様に木組みによって造られたものと想定できる。そして、棺中に1口の大刀と勾玉等の装身具が納められ、棺の蓋上にガラス小玉・水晶製切子玉の装身具と2口の大刀が置かれていたのが、木棺の崩壊とともに東側へ転落して床面に散乱したとも推測できる。遺物の散乱は追葬の痕跡では無いと考える。



第17図 第2主体部遺構実測図1



第18図 第2主体部遺構実測図2



第19図 第2主体部遺物出土状況実測図

第3章 まとめにかえて

調査の結果、団子塚古墳群H-1号墳は主体部を2基持つ「一墳丘複数横穴式石室墳」であることが判明（2基の石室が平行して築かれ、規模が基本的に同形同大で、格差が存在しない「双室墳」ではない）した。横穴式石室導入以前であれば複数の埋葬施設（主体部及び墳端埋葬）を一墳丘にもつことは珍しいことではないが、追葬可能な横穴式石室の採用後は、一墳丘に一主体部の傾向が強くなる。その中で、H-1号墳では第1主体部への追葬のみならず西側へ新たな埋葬施設（第2主体部）が造られた。副葬品の検討から、最も新しい時期の須恵器が第1主体部より出土しており、第2主体部築造・埋葬後、再び第1主体部へ追葬が行われていると推測する。それぞれの年代は遺物編報告書に詳細を記述するが、『有玉古窯』（浜松市教委2004）の時期区分に従うと、第1主体部初葬は遠江Ⅲ期後葉（TK209型式段階並行期）・第2主体部が遠江Ⅲ期末葉（TK217型式古段階並行期）・第1主体部第1追葬も遠江Ⅲ期末葉（TK217型式古段階並行期）・第1主体部第2追葬で遠江Ⅳ期前葉（TK217型式新段階並行期）という年代観を想定している。

楠本哲夫氏の分類に従うと、一墳丘複数横穴式石室墳であるH-1号墳は「先行して存在する墳丘・石室にいま一つの墳丘・石室を擦り寄せるように付加するもの」である「類型1」に相当する。また、田中良之氏によると、6世紀前葉～中葉の以降の古墳被葬者の基本的な親族構造は、家長夫妻と家長を継承しなかった子の二世代構成で、次世代の家長は基本的に新たに古墳を造営するのである。この家長を継承しなかった子、つまり傍系親族は父である先代の家長の墓に追葬され、自らの墓を造営することはしないという社会的理論があったとする（田中1995）。

H-1号墳は第1主体部の第1被葬者の一墳丘一石室墳へ新たに石室と墳丘を加えており、両袖式石室の第1主体部より無袖式石室の第2主体部が若干小規模ではある状況から、第2主体部の被葬者が第1主体部第1被葬者の直系で、家長を継承しなかった人物と説明できよう。第1主体部の第2、3被葬者は第1主体部第1被葬者直系で、家長を継承しなかったグループに属する人物で、あらたに家を興すことができない家長の次子・三子とも見ることも可能であろう。

団子塚古墳群は木棺直葬墳2基、横穴式木室墳7基、横穴式石室墳11基とともに堅穴式小石室1基、横穴式土坑墓1基と、複数の埋葬施設の形態が調査によって確認されている。未調査であるがB・D地区の古墳12基周辺で円礫が確認されていることから、横穴式石室墳である可能性が高い。また、昭和20年代まではH地区付近に20基近く古墳が存在したという話があり、団子塚古墳群は50基を越える大古墳群で、その多くは横穴式石室墳であったと考えられる。

調査された横穴式石室墳を見ると、単葬のものも多いが、楠元分類の「類型1」「類型3」の両型が確認されている。また、古墳群を時系列で見ると、木棺直葬墳のC-5号墳及びC-9号墳が6世紀前半期（遠江Ⅲ期前葉・TK10型式段階並行期）横穴式木室墳のC-10・D-1・D-2・G-1・G-2・G-3・G-4号墳が6世紀後半期（遠江Ⅲ期中葉・TK43型式段階並行期）、横穴式石室墳のH-1号墳第1主体部第1被葬者が6世紀末期（遠江Ⅲ期後葉・TK209型式段階並行期）、C-2・C-3・C-6・H-1号墳第2主体部・第1主体部第2被葬者が7世紀前（遠江Ⅲ期末葉・TK217型式古段階並行期）となり、C-4・C-8号墳及びC-7号墳第1主体部H-1号墳第1主体部第3被葬者が7世紀中（遠江Ⅳ期前葉・TK217型式新段階並行期）、C-7号墳第2主体部及びC-6号墳の小石室が7世紀後（第Ⅳ期後葉・TK46型式段階並行期）、C-7号墳第3石室で7世紀末期（遠江Ⅳ期末葉・MT21型式段階並行期）の築造となる。

当古墳群で横穴式石室墳が築造され始めた6世紀後半期から8世紀前半期までの東遠江社会を古墳から復元した鈴木一有氏の見解は、横穴墓が増加し横穴式石室墳が減ること、その副葬品や規模から大型横穴墓を上位とし横穴式石室墳が下位となる階層構造が見だし、「中央政權との繋がりを示す畿内系横穴式石室の有無は、在地首長層の勢力形成において副次的な要素」であるとする東遠江の独自性があったことを指摘している（鈴木2001）。そのような背景を踏まえ、墳墓は被葬者の生前の社会的階層を表現している考えると、H-1号墳の第1主体部は在地系の胴張形疑似両袖式石室で玄門の両側に立柱石を立てて玄室と羨道を区別する形式であることから、遠江全域を支配する様な階層（遠淡海国造クラス）の臣下（久努直・佐夜直クラス）に従う様な地位ではないかと推定してみたい。

「県内の横穴式石室の特徴から分離できる地域圏は、律令制下の数郡程度にほぼ対応する。古墳時代後期を通じて地域編成が進行し、律令制の地域区分に受け継がれていくのは当然の成り行きであろう」と鈴木一有氏が述べている（『静岡県内の横穴式石室』2003）とおりであるが、団子塚古墳群のある地域が律令期のどの郡に属していたか明らかとなっていない。団子塚古墳群の北側、現在の高南地区である低地を挟んで北側には地藏ヶ谷横穴群・堂下横穴群や金山横穴群が点在する地域がある。副葬品でも横穴群側に優位性が見られ、掛之上地区に郡衙関係施設を生み出した集団と見られる。菅ヶ谷横穴群の集団（久努直の系譜？）とともに、掛川市の山麓山横穴や宇洞ヶ谷横穴の集団（佐夜直か素賀国造の系譜？）とともに佐益郡（後の佐野郡）を形成し、養老6年（722）に至って山名郡を独立させている。団子塚古墳群の集団は後の時代の政治的地位は久努直の配下のような地位であったと考えることができなくはない。

最後に、芝田俊行氏をはじめとする和光商事株式会社の皆様は調査に対して理解を示して下さい、様々な方たちでご協力いただいた。また、ワコーゴルフ株式会社及び日帰り天然温泉 遠州 和の湯、温泉とらふく研究所の関係者の方々など、調査期間中にお世話になった皆様にあらためて感謝の意を申し上げ、更なるご協力とご指導をお願いして結びとしたい。

引用参考文献（順不同）

- | | | |
|-------------------|------|--|
| 原田和 | 1957 | 『浅羽風土記』 |
| 浅羽町 | 2000 | 『浅羽町史』 通史編 |
| 浅羽町 | 1997 | 『浅羽町史』 資料編一 考古・古代・中世 |
| 袋井市 | 1983 | 『袋井市史』 通史編 |
| 静岡県 | 1990 | 『静岡県史』 資料編 1 考古一 |
| 静岡県 | 1990 | 『静岡県史』 資料編 2 考古二 |
| 静岡県 | 1992 | 『静岡県史』 資料編 3 考古三 |
| 静岡県 | 1994 | 『静岡県史』 通史編 1 原始・古代 |
| 浅羽町教育委員会 | 1987 | 『北山道跡』 |
| 浅羽町教育委員会 | 1987 | 『北原道跡』 |
| 浅羽町教育委員会 | 1992 | 『団子塚道跡(1) ワコゴルフクラブ諸井ショートコース造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 浅羽町教育委員会 | 1999 | 『ワコゴルフ倶楽部ゴルフショートコース敷地拡張、施設拡充事業に伴う団子塚道跡確認調査の記録』 |
| 袋井市教育委員会 | 1992 | 『団子塚道跡』 遺構編 |
| 袋井市教育委員会 | 1994 | 『団子塚九号墳 出土遺物保存処理報告書（平成3・4・5年度 国庫補助事業）』 |
| 浅羽町教育委員会 | 1999 | 『五ヶ山B2号墳 発掘調査報告書』 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1993 | 『新堀道跡』 |
| 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1990 | 『高尾向山道跡』 |
| 袋井市教育委員会 | 1996 | 『高尾向山道跡Ⅱ』 |
| 袋井市教育委員会 | 2002 | 『見えてきた昔の掛之上 かけのうえ道跡 袋井駅前第二地区区画整理事業に伴う発掘調査報告書5』 |
| 袋井市教育委員会 | 2015 | 『掛之上道跡』 袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う第95次～106次発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1991 | 『袋井市三沢古墳群』 昌栄造建土石採集事業に伴う三沢2号墳緊急調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1987 | 『大門大塚古墳』 昭和61年度基礎資料収集調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1999 | 『石ノ形古墳』 |
| 豊橋市教育委員会 | 2012 | 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集『馬越長火塚古墳群』 |
| 楠本哲夫 | 1994 | 『第4巻 一帯丘内複数式石室墳の諸問題-とくに「家室墳」等にあられる終末期集約的特質について』『舞鈴古墳群の研究』（発）由良古文化研究会 |
| 香川県教育委員会 | 2003 | 県道観音寺普通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書『北原2号墳・北原道跡』 |
| 静岡市教育委員会 | 1997 | 静岡市埋蔵文化財調査報告書47『東大谷1号墳』 |
| 磐田市教育委員会 | 1997 | 『中原A古墳群発掘調査報告書』 |
| 静岡県考古学会 | 2003 | 『静岡県の横穴式石室』 |
| 泉森俊 | 1980 | 『双墓に関する二、三の問題について』『藤井祐介君追悼記念 考古学論叢』 |
| 田中良之 | 1995 | 『古墳時代親族構造の研究：人骨が語る古代社会』 |
| 鈴木一有 | 2001 | 『東海地方における後期古墳の特質』『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム |
| 鈴木敏則 | 2004 | 『第5章 まとめ』『有玉古窯』浜松市教育委員会 |
| 南部裕樹 | 2011 | 『合葬と追葬-「双室墳」をめぐって-』『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』13 立命館大学文学部 |

写真図版



1. 団子塚古墳群H-1号墳 遠景（東より）



2. 団子塚古墳群H-1号墳 第1・2主体部完掘状況（南より）



3. 団子塚古墳群H-1号墳調査前状況 遠景（南南西より）



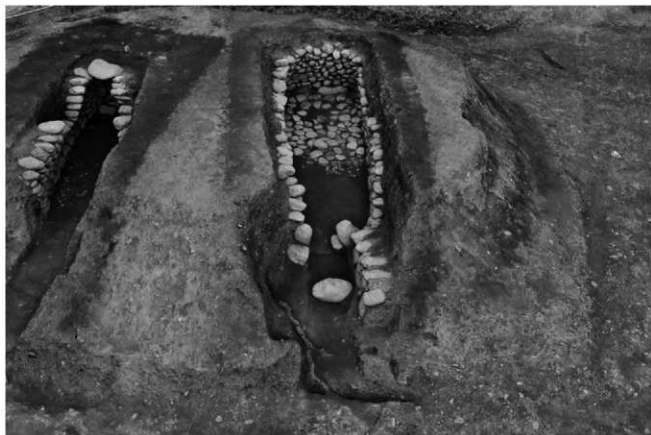
4. 団子塚古墳群H-1号墳調査前状況 近景（南南西より）



5. 団子塚古墳群H-1号墳 第1・2主体部完掘状況（直上より）



6. 団子塚古墳群H-1号墳 第1・2主体部完掘状況（南より）



7. 第1主体部全景（南より）



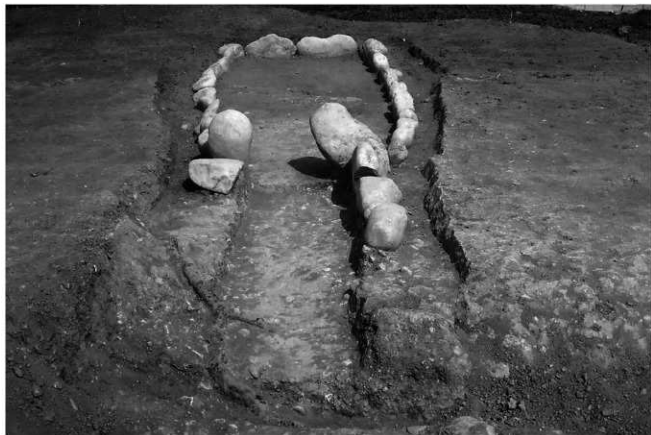
8. 第1主体部玄室床面状況（南東より）



9. 第1主体部玄室・奥壁状況（羨道より）



10. 第1主体部玄室南側・玄門状況（奥壁より）



11. 第1主体部根石全景（南より）



12. 第1・2主体部根石全景（西より）



13. 第2主体部全景（南より）



14. 第2主体部玄室・奥壁状況（羨道より）



15. 第2主体部玄室南側・玄門状況（奥壁より）



16. 第2主体部玄室床面状況（南東より）



17. 第2主体部根石全景（南より）



18. 団子塚古墳群H-1号墳墳丘断面（南より）



19. 第1主体部 遺物出土状況 1



20. 第1主体部 遺物出土状況 2



21. 第1主体部 遺物出土状況 3



22. 第1主体部 遺物出土状況 4



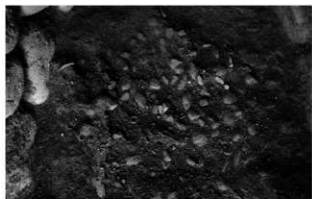
23. 第1主体部 遺物出土状況 5



24. 第1主体部 遺物出土状況 6



25. 第1主体部 遺物出土状況 7



26. 第2主体部 遺物出土状況 1



27. 第2主体部 遺物出土状況 2



28. 第2主体部 遺物出土状況 3



29. 第2主体部 遺物出土状況 4



30. 第2主体部 遺物出土状況 5



31. 第2主体部 遺物出土状況 6



32. 第2主体部 遺物出土状況 全景

報告書抄録

ふりがな	だんごづかこふんぐん えいちちごうふんはくつちようさほうこくしよいこうへん							
書名	団子塚古墳群H-1号墳発掘調査報告書遺構編							
副書名	和光商事株式会社施設拡充事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	水野雅彦							
編集機関	静岡県袋井市教育委員会 〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 TEL.0538-23-9264							
発行機関	静岡県袋井市教育委員会 〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 TEL.0538-23-9264							
発行年月日	2017年12月25日							
所収文化財名	団子塚古墳群							
文化財所在地	静岡県袋井市諸井							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界地測系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
だんごづかこふんぐん 団子塚古墳群 H-1号墳	しずおかけん 静岡県 ふくろいしもろい 袋井市諸井 字北山 2048-4 2048-10	22216	192	34° 43′ 49″	137° 55′ 39″	現地調査 平成24年11月13日 ～平成25年3月13日 資料整理 平成25年2月28日 ～平成25年3月21日 平成29年5月1日 ～平成29年12月25日	391.0㎡	民間企業施設拡充に伴う土地造成事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
団子塚古墳群 H-1号墳	古墳	古墳時代	円墳、横穴式石室2基		土器(土師器・須恵器)、 大刀、玉類、耳銀、銅銅、 鉄鍬、馬具、両頭金具		1墳丘2石室墳	

和光商事株式会社施設拡充事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

団子塚古墳群 H-1号墳
発掘調査報告書
遺構編

発	行	平成29年12月25日
編集・発行		袋井市教育委員会
印	刷	松本印刷株式会社

